

# 北條秀司「王将」論

—— 阪田三吉表象の諸問題 ——

稲 本 力 信

はじめに

北條秀司「王将」は実在した将棋棋士の阪田三吉<sup>二</sup>をモデルとして作られた戯曲である。阪田三吉は明治から昭和初期にかけて活躍し、当時ライバルであった関根金次郎と幾度となく熱闘を繰り広げた。家庭を省みず将棋ばかり指していたせいで、妻や子どもが心中未遂を起こしかけるなど、波乱万丈な人生や、将棋で見せる奇抜な戦法や指し手で多くの人々に愛され、影響を与えた。エピソードとしては一九三七年、三吉が六十六歳のときに後の名人である木村義雄を相手に行われた「南禅寺の決戦」で、当時はありえないとされた初手△九四歩を指したことが有名である。結果は負けであったにもかかわらず、三吉が指した初手△九四歩は当時の人々に大きな衝撃を与えた。影響を受けた作家として織田作之助が挙げられる<sup>三</sup>。織田作之助は「聴雨<sup>四</sup>」「勝負師<sup>五</sup>」の短篇二つと、名評論として知られる「可能性の文学<sup>六</sup>」をこのエピソードを元にして執筆した。

坂田は第一手に、九三の端の歩を九四へ突いたのである。平手将棋では第一手に、角道をあけるか、飛車の頭の歩を突くかの二つの手しかない。これが定跡だ。誰が指してもかうだ。名人が指してもへボがさしてもこの二手しかない。(中略)坂田三吉は定跡に挑戦することによって、将棋の可能性を拡大しようとしたのだ。六十八歳の坂田が実験した端の歩突きは、善悪はべつとして、将棋の可能性の追求としては、最も飛躍してゐた。ところが、顧みて日本の文壇を考へると、今なほ無気力なオルソドックスが最高権威を持つてゐて、老大家は書式の定跡から一步も出ず、新人もまたこそそとこの定跡に追従してゐるのである。

この、定跡に囚われず可能性を追求した阪田三吉を論じることを通じて権威主義的な戦後文壇を批判した「可能性の文学」は話題になり、北條秀司の戯曲の主演を務めていた辰巳柳太郎の耳にも入ることになった。

「王将」を書くことになったのは、たしか終戦の二年ほど後だったと思う。ちょうどその頃織田作之助が可能性の文学という人気論文を書き、その中に坂田三吉の棋法を採り上げたのを、読んだのか聞いたのか、辰巳がどうだと言つて来、わたしも同郷の奇人としてその人となりを書きいていたので、おもしろい、やろうととびついたのだつたと思う。七

そして一九四七年、東京有楽座で「王将」は初演され好評を博した。その後も約三十年間に渡つて三度目の映画の続編にあたる「続・王将<sup>八</sup>」も含め五度も映画化されたり、三作目の一九六二年版映画「王将<sup>九</sup>」で村田英雄が歌う主題歌「王将」のレコード売り上げが三百万枚を超え戦後初のミリオンセラーとなるなど、北條秀司「王将」は人気コンテンツとして多くの人の目に触れることとなった。一見、「王将」は順調にヒットしているように見えたが、その過程である問題が起こってしまう。阪田三吉の遺族や後援者が実際の阪田三吉と「王将」の主人公としての阪田三吉の人物像の相違を理由に続編の執筆拒絶を申し出たのである<sup>一〇</sup>。それに対し北條秀司は

私が敬愛する同郷の大天才坂田翁の生涯を芸術作品化する事が、なぜそのように反対を受けなくてはならないのだらう私にはそれがわからなかった。私が知り得た所の拒絶理由は、前作「王将」を書いたときの作者の不正意、登場人物の虚構、遺族としての羞恥感が主たるものであったが、私には一つとして首肯できぬ事柄であった。(中略)殊にあの作品によって、遺族として羞恥感を

感じるといふセンスに至つては、到底共に談ずるに足らぬと私は思つた。天才坂田翁は決して遺族のみの私有物ではないのである。作家として、殊に同郷の後輩として、敬愛する翁の生涯を温かい眼を以て完全な姿に書き残すことは、私の自由であり、権利であり、そして義務である。遺族の私感情によつて、それは断じて妨害できるものではないと信じる。ともあれ二つのトラブルによつて、大阪という風土の持つ知性の低さを、残念ながら私は認めざるを得ないのである。二

と述べ正当性が自らにあるとして遺族への不満をぶつけている。一見強すぎる言い方にも見受けられるが、阪田三吉と近しかったと思われる人たちの「王将」を見た反応を実際に目にしてる北條秀司の視点からすれば文句を言いたくなるような出来事だったのかもしれない。

第二篇から登場する君子という娘さんもわたしは拵えた人物だ。モデルは令息義夫氏の未亡人喜美子さんである。喜美子さんは翁とは血のつながりはないのだが、翁のお孫さんを女の手一つで育て、先年も翁の墓碑を建てる急先鋒になったり、なかなか心の高い人である。此の人が、第一篇初演の時、幕が下りてから楽屋へ案内すると、まだ舞台のつくりのまままで居た辰巳の顔を見るなり、ポロポロと涙をこぼして泣き出された。あとで訊いたら「まるでおじいちゃんが出て来られたような気がした。」そうなのである。三

また遺族や後援者が「王将」に反発を持つ一方で、映画で描かれる坂田に対して遺族たちとは逆の立場から疑問を持つ人も存在する。

劇作の必要から彼は異常な実力者のようになっているが、それほどの棋士ではない。(中略)

彼の性格についてはいろいろ異論が多い。彼を目して非常な人格者となす者も少なくない。ただ当時の棋界にあるがため今こそ明らかにしておかねばならぬことは、彼が非常なる猜疑心の持ち主であったことである。彼は目に一丁字もなかった。そのせいもあるうが決して人を信ずることができなかった。

これは萩原その他彼に多く接した棋士の一致して説くところである。常にこの観点を失せずして、初めて当時の棋界とそれに対処した彼の行動を判定しうるものと思う。よく彼が後援者に誤られたという者があるが、果たしてどうか。この点あるいは映画と事実が多少反するのではあるまいか。一三

酒井隆史<sup>二四</sup>は阪田三吉の遺族や後援者の不満が「王将」の原作者である北條秀司に向かったことに関してこのように述べている。

北條秀司による阪田三吉をめぐるイメージの複合は、新国劇の上演、そして、映画、村田英雄のヒット曲、河内音頭などを介して拡大し、その都度さらなる歪曲や、無関係のべつの物語との圧縮を重ねて、膨らんでいった。たとえば、阪田三吉と小春を題材とした歌謡曲は多いが、その中には坂田が酒乱で遊び好きといった歌詞も見られる。しかし、阪田三吉は、酒は飲めなかったし、

また「王将」で過激に演出されているように芸妓恐怖症であった。遺族や後援者たちの不満も、このように膨張するとともにますます実像とはなれていくイメージにあり、その元凶として北條版「王将」にむかったのだろう。

これまで阪田三吉という人物に関しては様々な意見が述べられてきたが、肯定的な意見と否定的な意見が極端に別れそれらが入り混じることによって阪田の実像が見えにくくなっているように思う。その原因は多くの場合、阪田に対して肯定的な人は実際以上に肯定的に阪田を語り、阪田に否定的な人は実際以上に否定的に阪田を語るという当時の阪田を知る人々の主観によるものであるだろう。やはり当時の人々にとっては自らの視点で見た阪田三吉が全てであると考える。自分が知らない阪田三吉は認めたくない感情があったかもしれない。だからこそ阪田の情報客観的に見ることができるとは分析する意義があるのではないだろうか。

本論では阪田三吉自身が語った内容を文字に起こしたとされる「将棋哲学<sup>二五</sup>」を改めて読み直して元になった棋譜との比較を行い、また当時の阪田の棋界における立場と「将棋哲学」を関連付けることで、これまでは見えてこなかった阪田三吉像を可能性として提示したい。

そして阪田の死後から現代にかけて、どのように彼が表象されてきたのか、阪田が主人公としてモデルになっている北條秀司「王将」を中心に見ていきたい。

## 一 阪田三吉と「将棋哲学」

北條秀司「王将」で一番の見せ場として描かれており、最も有名なエピソードとして知られているのは阪田が初めて上京し、関根と戦って銀が「泣いてゐる」という名台詞を残した場面である。このエピソードは阪田三吉が半生を回顧したエッセイである「将棋哲学」の「駒になつた坂田 盤上で泣く」が元になつてゐる。「将棋哲学」は昭和四年一月八日から一月十九日にかけて『大阪朝日新聞』に掲載された。阪田がこれまでの対局や出来事を振り返り当時の心境を語っていく形になつており、阪田三吉を語る上で最も重要なテキストだと言へる。多くの阪田に関する著作がこの「将棋哲学」でのエピソードや阪田の心境を参照しているがこのテキストを完全に信用できるかわからない事情がある。それは、著者は阪田三吉として知られてゐるが、実際には当時朝日新聞大阪本社の記者であつた小倉敬二が阪田の談話を文字に起こしたものであり<sup>一六</sup>、阪田の言葉が全てそのまま書かれてゐるとは断定できないということである。小倉がより伝わりやすく言葉を変えていたり、阪田の談話の解釈を間違えてゐる可能性もあるだろう。ここでは「駒になつた坂田 盤上で泣く」とそれを語る上で元になつた対局を比較していきたい。

「将棋哲学」の「駒になつた坂田 盤上で泣く」を語る上で元になつた対局は大正二年四月六日から七日の二日に渡つて指された△関根金次郎▲阪田三吉戦<sup>一七</sup>であつた。ここで述べられてゐるのがどの対局を指すかについては諸説あり、その点は後で詳しく検討するが、通説となつてゐる大正二年四月六日の対局の棋譜を巻末資料編の【資料一】に掲げた。この対局が行われたにはある背景が存在

する。それは一九〇六年四月二十三日に同じく関根金次郎を相手に行われた対局において、三吉自身は勝ちだと思つてゐた将棋を三吉が知らなかつた同じ局面が続いた場合攻めてゐる方が手を変えなければならぬ「千日手」というルールによつて負けにされてしまつた。リベンジに燃える三吉はその後も何度か対戦し、当時八段の関根金次郎との戦績は、直近の三番勝負では三吉が二勝一敗で勝ち越してゐる互角のはずであるのに実力を六段までしか認められなかつた。それを不満に思つた阪田は自らを七段の実力があると『大阪朝日新聞』の紙面上において宣言したのである。

関西将棋会の驍将なる当地の阪田三吉は従来六段なりしが自分にも七段の技量ありと信じ同業者も亦十分に七段の腕前あるを認め居れば今度七段昇格を發表したり。同人七段昇格に不平ある人は実地に手合わせしてその鼻を挫くべしとぞ。一八

しかし、簡単に高い段位を認めるわけにはいかない東京の棋士たちはこれを黙殺した。関西側からは大阪に関根金次郎を呼んで対局させようとする動きもあつたが上手くいかず、満を持して行われたのが大正二年四月六日から七日の二日に渡つて指された「泣き銀の局」と呼ばれる対局である。三吉にしてみれば七段を宣言してから三年越しの待望の対局であつた。以下は「駒になつた坂田 盤上で泣く<sup>一九</sup>」の引用である。

その時自分は二五の銀といふ手を打つた。その銀は進退窮まつて出た銀だつた。出るに出られず、引くに引かれず斬死の覚悟で

捨て身に出た銀であつた。ただの銀ぢやない。それは坂田が銀になつて、うつ向いて泣いてる銀だ。それは駒と違ふ。坂田三吉が銀になつてゐるのだ。その銀といふ駒に坂田の魂がぶち込まれてゐるのだ。―その駒が泣いてゐる。涙を流して泣いてゐる。

今までわたしは悪うございました。強情過ぎました、あまり勝負にあせり過ぎました。これからは決して強情はいたしません、無理はいたしません、といつて坂田が銀になつて泣いてゐるのだ。この一番を負けたら何年かの苦心が泡と消える、スゴスゴと旗を巻いて退却しなければならぬ。何でも勝ちたい、勝ちたい、と思つてあせつた末さういふ手が出たのだつた。根が剛情なものだからやはりさういふ剛情な手が出る。

その時、関根さんの方でその銀を大事にして―敵方にニユーツと侵入した銀ではあるけれど、折角出てきた銀である。今殺さなくとも、しばらく滞留させて待遇してあげやう、まあゆつくりなさい―といった態度に出られたらとても勝てる将棋ではなかつた。それをその態度に出ず、憎い敵だと思つて、一気に討ち取らうとして歩を突いて出たので、こちらでは銀を守るため銀の尻へ歩をつく、そしてグルグル逃げ廻つたために、殺されやうとした銀が却つて敵陣で存分の働きをすることができ、形勢一転してたうとうこの晴れの勝負に勝つた。

この対局で阪田が▲二五銀とした局面図を巻末資料編の【資料二】に掲げた。この対局を指す「泣き銀の局」という通称は銀が「泣いてゐる」という有名な文句に由来したものだ、その文句自体の知名度が先行してしまい本文全体はあまり知られていない。そこでこ

の本文と元になつたと思われる△関根金次郎▲阪田三吉戦の棋譜とを比較すると気になる点がいくつか見つかった。

一つ目は表現の問題である。「その時自分は二五の銀といふ手を打つた」という文の「打つた」という表現があるが、将棋では盤上の駒を動かすことを「指す」、相手の駒を取つてその駒を自分が使うことを「打つ」と呼び、△関根金次郎▲阪田三吉戦で盤上の銀が動いているということは「指した」と表現するのが正しく、「打つた」では元の棋譜とは矛盾してしまう。逆に「一気に討ち取らうとして歩を突いて出たので」という文の「歩を突いて出た」の局面で元の棋譜では歩を「打っている」のであり表現が一致していない。他には「殺されやうとした銀が却つて敵陣で存分の働きをすることができ」という文があるが、「敵陣で存分の働きをすることができ」の部分で元の棋譜と比較すると銀が存分の働きをしたのは「自陣」であつて「敵陣」でないのは明らかであることがわかる。もちろんこれらは単純なミスの可能性もある。しかしこの短い本文でいくつもの表現の間違ひが見つかったこと、阪田との談話を文字に起こした小倉敬二が元々将棋の専門である観戦記者ではないことを考慮すると、「将棋哲学」は阪田から聞いた大雑把な話を小倉敬二がかなりの割合で補完したものであると推測できないだろうか。もちろん可能性の一つではあるが、「将棋哲学」を改めて読み直す意義は示せたように思う。

二つ目は「泣き銀の局」の可能性がある対局が、一九一三年四月六日から七日にかけて香落ちで行われた△関根金次郎▲阪田三吉戦以外にも存在していることである。それが一九一五年四月三日に行われた▲阪田三吉△井上義雄戦<sup>1)</sup>である。その棋譜を巻末資料編の

【資料三】に掲げた。観戦記者の天狗太郎が書いた記事である「勝負師一代―坂田三吉聞書―②三」では

一日目の夕刻に指し掛け、井上は自宅に坂田は近くの旅館に戻った。観戦記者の桑島鈍聴子は井上と同道した。「この将棋、わしの勝ちじゃよ。」と自信満々であった。

つぎの朝、鈍聴子は坂田に頼まれていたので旅館に迎えに向かった。一睡もしなかつたらしく、坂田は浮かぬ顔をしている。目は充血しているように見えた。旅館を出て歩きながら、坂田は、「この将棋は負けや。わたしの銀が泣いてるよってあきまへんわ」いつになく弱気を吐いた。やっぱりと鈍聴子は前夜の井上の大言壮言を思い出し、「井上さんは勝ちだといってましたよ」と口をすべらした。

「そら、ほんまだっか？」

坂田は立寄り、鈍聴子の顔をのぞきこんだ。

「井上はんが：そういうてましたか」

急に目を輝かせて、せかせかと下駄を鳴らして歩き出した。

このとき坂田は、敵に油断がある、それなら、盛り返すことができる…と、とっさに感じとって勇氣百倍した、と、のちに弟子と語ったという。

指し掛けの坂田の二枚銀が立往生して、誰の目にも不利というよりは敗勢に近い絶望的な岐れになっていた。(中略)坂田は盤にしがみつくようにして考えこんでいた。どう反撃に討って出ても、勝ち目はなさそうだ。「強情な銀や。動きよらへんしな…」と前夜、まんじりともせず考えつづけた。「銀が下つとけばよかったのに…」

と腹立たしそうに呟きつづけた…。局面が進むにつれ、この動かぬ銀が、ますます形成を悪化させるようである

とされており、△関根金次郎▲阪田三吉戦は▲二五銀だったのに対し▲阪田三吉△井上義雄戦では▲四四銀であったという違いはあるが、銀を活用するのに苦労していること、またそれを銀が「泣いて」と表現していることが共通している。天狗太郎は同じ記事の中で△関根金次郎▲阪田三吉戦にも触れているが▲二五銀という指し手は全く文中に表れず唯一逆転のきっかけの指し手として▲四八角打を挙げている。また天狗太郎は著書『将棋101話三』で

目に一丁字もなく、天下を風靡した独特の坂田将棋は、その才槌頭から産み出されたものであった。その着想が、現代将棋の骨格をなすと高く評価したのは、升田幸三九段である。形は力将棋に見えて、その構想には余人を寄せ付けぬ新しさがあった。

掛値なしに、将棋の天才であった。

映画や芝居で有名になったのは、「銀が泣いている」という台詞である。あの台詞は、劇作家北條秀司の創作である。映画のその場面の局面は、監修に当たった升田さんが創作した。升田さんから、そのことを聞いた。妻の小春も、本名は「こゆう」という。

「銀が泣いている」の台詞は創作であるが、それに似た話はある。大正四年に上京して、井上義雄八段と戦ったとき、中盤戦で坂田の銀が立ち往生して苦戦に陥った。

一日目は指掛けとなって、旅館に戻った。翌朝、観戦記者の桑島鈍聴子が迎えにゆくと、

「わての銀が泣いてるよって、この将棋はあかん…」

と浮かぬ顔をした。一方の井上は勝ち将棋だと自慢している。何気なく鈍聴子は、そういった。

「ほんまでっか？」

坂田の目は妖しく輝き出した。二日目の対戦で、非勢を盛返して坂田は、もののみごとに井上を討取った。

としており、「銀が泣いている」の台詞を創作であると考えていた。「駒になつた坂田 盤上で泣く」の本文を知らなかったのではないかと思われる。「駒になつた坂田 盤上で泣く」の描写を見る限りでは「関根さん」という対局相手の名前や、指し手の描写が一致している△関根金次郎▲阪田三吉戦が「泣き銀の局」であるのかもしれない。

しかしここで言いたいのはどちらが正しい「泣き銀の局」なのかということではない。阪田が銀が「泣いてゐる」という言葉を使ったのは△関根金次郎▲阪田三吉戦だけではなかったということである。阪田は△関根金次郎▲阪田三吉戦を特別な対局だと考えて銀が「泣いてゐる」と表現したのではなく、単純に銀の働きの悪かったのでいつも通りそれを銀が「泣いてゐる」と表現した可能性が考えられるのではないか。

そしてその中で指された▲二五銀という手は△関根金次郎▲阪田三吉戦について言及しており、棋譜も知っているはずの天狗太郎が「銀が泣いている」の言葉から全く連想できなかった指し手だという事である。▲二五銀という手は、「駒になつた坂田 盤上で泣く」という取っ掛かりが存在しなければ誰にも見向きされなかった指し

手なのではないのだろうか。

『将棋新報』二二に掲載された△関根金次郎▲阪田三吉戦の感想戦を見ると

又此處の局面につき終局後に坂田氏自ら曰く自分が四四飛と歩を取って廻った時に若し関根氏にして一七歩と打たずに二六歩と突き急に銀を取れと来ず何時でも取るぞと指さるれば大に困りしと思へりと云いひ関根氏も成る程それがよかりしならんとの話なりしが激戦中のことなれば関根氏は此銀を何時までも玉の近傍に置く危険を感じて早く一七歩と打って退けしものなるべし。

とあり阪田が▲二五銀の数手後の話をしており「四四飛と歩を取って廻った時に若し関根氏にして一七歩と打たず」という部分は「駒になつた坂田 盤上で泣く」の「一気に打ち取らうとして歩を突いて出たので、こちらでは銀を守るため銀の尻へ歩をつく」という描写とも合致する。しかし「駒になつた坂田 盤上で泣く」で阪田自身があればどこまで後悔し、敗着だと考えていた▲二五銀という指し手自体は感想戦では一切触れられていない。関根金次郎は

イヤハヤ飛んだ失策をやつて負け将棋にして仕舞ひました又々歩切れで凌ぎやうもありません只投るに早い計りで指して居りますが肺病同様で見込みがありません實を云へば此将棋は引きつづきズット私が宜しかつたのでありましたが今朝に至りフラフラとした爲めに四四香と云う悪手を指し其ために形勢崩壊して忽ち敗兆を来たしました面目のない失策で御ざいます

と終盤の攻防で勝敗が分かれたと考えており、実際に感想戦も終盤戦がメインになっている。阪田はこの対局を「晴れの勝負」としており、その意気込みは相当なものであった。その意気込みを示すものとして「将棋哲学」の「関根八段との争ひ将棋<sup>二四</sup>」では

さていよいよ関根八段と対局することになった。勝つか負けるか。「千日手」のいきさつもある。負ければ坂田一人の恥ではない。関西の恥である。堂々と新聞に七段を発表し一廉エラさうなことを言つて上京しながら、惨めな負け方をしたとあつては、世間に顔出しできぬ、高野山にでも上つて坊主になる。そんな決心をもつて戦ひに臨んだ。

としており、関西の代表として並々ならぬ覚悟を持っていることがわかる。また『将棋新報』では△関根金次郎▲阪田三吉戦について

関根対阪田の局面如何と云ふに当時は午前十一時より対局し此日は坂田氏三筋を以て開戦せんとすの予言に違はず果して三筋よりして飛、角、銀、桂を以て総攻撃を始め観客は其周囲に蟻集し誠に晴々しき対局と見られたり、棋譜は此日の主戦たれば特に此処に掲げて中間に両棋士の態度をも註することとなしたり。

とあり、事前に三間飛車を宣言するという大胆なことをして、関根側の香落ちのハンデを無くそうとしていることがわかる。△関根金次郎▲阪田三吉戦は初めて上京する阪田にとってこれから東京

の棋士を相手にやっつけていけるかどうかを占う重要な対局であつたと言えるだろう。そしてその対局に勝つたことは阪田にとって自らの実力を東京の棋士に証明することにつながり、関根と初めて平手で対局できることにもなった。その喜びは相当なものであつたと考えられる。だとすればなぜ阪田はこの対局を語るために▲二五銀という指し手を選んだのだろうか。普通は「晴れの勝負」だからこそ、その対局を代表する逆転の指し手を選ぶのではないだろうか。△関根金次郎▲阪田三吉戦では他にも香車の当たりを避けつつ桂馬の効いているところへ進み、金と桂馬の交換だが桂馬を取った手が馬に当たるといふ捌きの手や自分から角と香車を交換した鬼手と呼ばれる手はあつた。見どころは終盤の攻防であつたと言つてよい。それでも阪田は中盤の上手く咎められれば敗着になるかもしれない、言つてしまえばたつたそれだけの指し手を「晴れの勝負」を語る上で選んだのである。

他の妙手や鬼手を差し置いて採用された▲二五銀という手にはこの対局における指し手としての善悪や勝敗に関係なく阪田の人生を語る上でもっと大きな意味が込められているように思える。

阪田が▲二五銀にこだわった理由について考察するために改めて「駒になつた坂田 盤上で泣く」を見ていきたい。「その時自分は▲二五の銀といふ手を打つた。その銀は進退窮まつて出た銀だつた。出るに出不れず、引くに引かれず斬死の覚悟で捨て身に出た銀であつた」とあるように、銀は捨身の覚悟で斬り死に出た銀である。本来ならなりふり構わず敵陣へ攻め込むべきだろう。にもかかわらず「今までわたしは悪うございました。強情過ぎました、あまり勝負にあせり過ぎました。これからは決して強情はいたしません、無

理はいたしません、といつて坂田が銀になつて泣いてゐるのだ」と銀は泣きながら反省している。自分が勝利したはずの対局を振り返るには大げさすぎるように思える。阪田は何を考へて自らを捨身の銀に例えたのだろうか。「将棋哲学」が新聞に掲載された当時の阪田の棋界における立場を考へてみたい。

「泣き銀の局」に阪田が勝利してから「将棋哲学」が『大阪朝日新聞』に掲載されるまでには当時の棋界に大きな二つの出来事が起こつた。一つ目が一九二一年一月二十九日、十二世名人の小野五平名人が亡くなつたあと誰が名人を継承するのかという問題である<sup>三五</sup>。名人の候補となつたのは当時名人の次に段位が高かつた八段の棋士である関根金次郎、その関根に平手で勝利し、また通算で勝ち越して小野名人から八段を認められた阪田三吉、関根の弟子で八段であつた土居市太郎、引退してゐたが八段であつた小菅剣之助がいた。関根の弟子であつた土居は辞退し、すでに引退して実業家として活躍してゐた小菅も関根を十三世名人に推挙した。そして関根に勝ち越してゐた阪田であつたが小野名人が亡くなつた次の日の『大阪朝日新聞』に名人継承問題について言及してゐる。

昨年十月名人が九十歳祝賀大棋会に私が参加した際、翁は私に對つて「俺は若い時にある暗示によつて九十一、二歳が定命といふ事を感じし確信してゐる、今度の会後名所などを巡歴し度い就いては名人の継承の事も生あるうちに考へて置かねば甚だ心懸りだ」との事に私は先輩関根八段が継ぐの至当なる事を力説しました。現今棋壇に立つものにて準名人の八段格は氏を除きて土居氏と自分だけで土居氏は関根門下の人なればこれに異存ありとも

思はれぬ、迷ふ事なく関根氏に御決定あるが安泰です。

(中略)

自分は無段より一足飛びに八段なつた者故、問題を起り易き事に対して正理を主張されたのを今も徳としてゐます<sup>三六</sup>

名人継承問題には諸説あり、関根が名人に就位した数年後に阪田に名人を譲るといふ裏取引があつたとする説<sup>三七</sup>もあるが、一九二一年五月、関根が十三世名人になる際に阪田が賛成の意思を持つていたことは確かなようである。関東と関西の対立がある中、無事関根が十三世名人に就位し名人継承問題は解決したかのように思へた。しかし名人位を争ひ再び問題が起こることになる。それが二つ目の大きな出来事であり、阪田が東京棋界の了解も得ず、正式な手続きも踏まず「関西名人」を名乗つた事件である。事の発端は名人になつた関根がそれまで七段だつた棋士四人を一挙に八段に昇段させたことであつた。その事に不満を持つた関西の有力者たちが阪田を名人に推薦したのである。以下はその事件を記した一九二五年三月十二日の『大阪朝日新聞』の記事<sup>三八</sup>である。

古来将棋道で八段は準名人格として最高段位であり容易に許されないものとされてあつたが昨秋より高段棋客が相次で昇格した、一面から見れば棋道の隆盛を語るものともいへるが、心あるものはこれを以て寧ろ棋界の前途に一の暗い影を投げるもので遂には收拾すべからざるに到るかも知れぬと憂慮しつつあつた

(中略)

果然最近に至りその聲益々高くなり中には「名人の名称に都合

悪くば宜しく十一段を以て表彰すべし」を力説する人さへあった。しかし棋道では八段以上に昇格せしむる場合の規則が事実に於いてなく、一方肝腎の坂田氏は寧ろ無段を標榜して「何等の拘束なく自由に手合せして生涯を将棋道に捧げ度い。」この信念を抱きこの問題は容易に解決しなかったが

(中略)

ここに賛成者といふより首唱者と見るべき士八十余名に及んだ、固く決してうけなかつた坂田氏も感激し遂に名人樹立を快受することとなった。

多くの後援者から推薦され坂田は「関西名人」を名乗ることになった。しかし東京の棋士たちからはそれを名人の僭称とみなされ絶縁されることになったのである。以後その状態は十二年続き、坂田が東京棋界と和解して再び公式の場で対局するのは一九三七年に行われた「南禅寺の決戦」であり、すでに坂田は六十六歳になっていた。そして「将棋哲学」が『大阪朝日新聞』に掲載されたのは坂田が東京棋界から絶縁されて四年後の一九二九年である。「将棋哲学」での対局の振り返りは一九一九年五月に行われた▲土居市太郎△坂田三吉戦を最後に終わっている。名人継承問題が一九二一年にあったことを考えればその前のことまでしか振り返られていない「将棋哲学」はただ坂田が自らの半生を語っただけのテキストであるように思える。しかし掲載されている時期が正に絶縁されている最中であつたことを考えれば、東京棋界から絶縁された坂田の思いが「将棋哲学」に表れていてもおかしくないのではないか。

坂田は何を考えて自らを捨身の銀に例えたのかという問いを改め

て確認したい。

「将棋哲学」には坂田が十二世名人であつた小野五平の「心が澄み切つて毒気がなく、勝敗を争う心がない」ところを称賛する描写が見られる。また「瓢箪の栓をぬいた、ふわつとした心もちにならなければならぬ」というフレーズが何度も現れる。これらは一九二五年三月十二日の『大阪朝日新聞』で坂田が語つた「何等の拘束なく自由に手合せして生涯を将棋道に捧げ度い」というコメントに通ずるものがある。どちらも純粋な気持ちで将棋と向かい合うということである。

名人になりたいと思う気持ちも関西を背負つて立つ人間としての矜持ももちろんあつただろう。しかしそれ以上に盤外での名人争いや東西の対立といったしがらみから抜け出してただ純粋に将棋を指したい。それが坂田の本心だったのでないだろうか。東京棋界の了解を得ずに名人を名乗つたことには後援者に後押しされ、断りきれなかつたという背景があつた。それでも名人を名乗つたことは事実であり、坂田自身にも責任はあつてそれをひどく後悔している。その自分の姿を捨身で斬り込んだ方がいいが身動きがとれない銀になぞらえて表現したものが「将棋哲学」の「駒になつた坂田 盤上で泣く」なのではないだろうか。そこには和解したいという意味も隠れていたかもしれない。しかしそれは長い間叶わず坂田は無為に歳を重ねるだけになつたのである。

## 二 北條秀司「王将」に表象される阪田三吉

### 二一 一九六二年版映画「王将」

一九六二年版映画「王将」<sup>五</sup>は監督が伊藤大輔、阪田役が三国連太郎、残りのキャストは省略するが、注目したいのは将棋監修という欄があり升田幸三九段が名前を連ねていることだ。升田は一九六二年版だけでなく一九四八年版、一九五五年版も将棋監修を担っている。阪田三吉に直接指導を受けたりするなど、交流があった人物であり監修を担当したのは自然なことだったのかもしれない。

一九六二年版だけではなく四度の映画「王将」はいずれも北條秀司「王将」の第一部を映像化したものであり、阪田が初めて上京して行った「泣き銀の局」が一番の見せ場になっている。銀が「泣いてゐる」という台詞はこのシーンで有名になったのである。

一九六二年版の「泣き銀の局」の場面について見ていきたい。阪田の行き場を失った二五の銀が動けないことを泣いていると表現したことが印象的なこの対局は関根名人の左香落ちで行われた。

しかし実際の「泣き銀の局」の棋譜と一九六二年版でこの対局を確認するとハンドレをつけて行われているはずなのにお互い駒が全て揃っている。それどころか対局の内容自体、実際に行われていたはずのものとは全く違うのである。全て違うのかと思えば印象的な指し手であった▲二五銀という手自体は、実際の対局では盤上の銀を動かして指されたものであるのに対し、映画では持ち駒としての銀を二五に打っているという違いはあるが間違いなく出てきている。一

九六二年版での「泣き銀の局」で坂田が▲二五銀打とした局面図を巻末資料編の【資料四】に掲げた。なぜ対局の内容自体は全く違っているにもかかわらず、▲二五銀という手は確かに出てきているという奇妙なことが起こっているのだろうか。

一九六二年版での「泣き銀の局」の原作になっているはずの坂田三吉と関根金次郎との対局後を描写した戯曲「王将」の中で▲二五銀という手について触れている部分を抜粋する。

小倉 まさかあれだけ強烈な反撃力が出るとは思わなかったですよ。今朝二五へピシリッと銀を打ち込んだ時の、あの凄まじさはどうでした。

(中略)

金杉 菊岡さん、今日の銀の打ち方なんぞと云うものは、あなたに見せたかったよ。

菊岡 関根君大分弱ったと云う話だね。

宮田 弱ったも何も、顔の色がさつと変ってしまいました。がな。そらそうやる。あんな大胆な手駒を打つ人は、天下広しと雖もわが坂田先生のほかにはないねんよってな。

(中略)

玉江 あの銀を置いた時やみなどうや。カタカタカタと震える音が座敷中にひびいたやないか。

(中略)

三吉 (やや自分を取り戻した語調で) …小春、わい今日の将棋で、二五の銀を打ったったんや。

小春 そうやそうだんな。

三吉 負けかかったた将棋が、その銀でぐっと持ち直して来よったんや。みんなもそれを褒めて呉れた。そやけど、今から考えろと、あれは苦し紛れに打った手やった。ええ、もうどうにでもなれッ。と思もて、半分自棄のやんぱちでうったったぎんやった。

小春 (言葉なし)

三吉 それちゃんとして知ってけっかんねん。お父っあんの打った銀はぶるぶる震えて云いよった。その通りや。じっと見てると、盤の上で銀がしくしく泣いとる…。その銀の悲しさがわいの胸一杯にひろがって来よって、銀がわいか、わいが銀か、わからんようになってしまよった。

小春 (いたましげに眼を伏せて聴いて居る。)

三吉 若しあの銀を関根の方であわてて討ち取るうとせなんだら、わいはあのまま負けてしもてたんや。考えても冷や汗が出るわ。

また一九六二年版で「泣き銀の局」の後、記者が▲二五銀の指し手について言及している部分を抜粋する。

記者 「そうそう、そうなんだよ。もはや脈なしと諦めていた矢先だけに驚いたねえ。ここで▲二五銀とは日本の将棋始まって以来の妙手だよ。坂田流力将棋の真髄とでもいうべきだね。」

登場人物の言動をまとめると▲二五銀という手は、強烈な反撃であったこと、関根名人の顔がさつと変わるほどの即効性のある大胆な手だったこと、局面がすでに佳境にあったこと苦し紛れに打った

手だったこと、銀の行き場がないこと、正確に対処されれば坂田は負けていたことがわかる。また映画の言葉からは▲二五銀自体が妙手でそれによって劣勢だった将棋を逆転したかのように描かれている。

次にこの場面を描写する上でもとになったと思われる阪田三吉「将棋哲学」の「泣き銀の局」の振り返りについて改めて見ていく。

「その銀は進退窮まって出た銀だった。出るに出不れず、引くに引かれず斬死の覚悟で捨て身に出た銀であった」、「まあゆっくりなさいーといった態度に出られたらとても勝てる将棋ではなかった」、「グルグル逃げ廻ったために、殺されやうとした銀が却って敵陣で存分の働きをすることができ」とあり、▲二五銀は選択肢がなく苦し紛れに打った手だったこと、関根から見れば銀を放っておいてもよいくらい余裕のある局面だったこと、正確に対処されれば阪田が負けていたこと、銀が働くまでグルグル逃げ廻る時間があったことがわかる。

戯曲「王将」と「将棋哲学」におけるそれぞれの「泣き銀の局」の描写を比べると、本来は同じ対局の同じ局面であるはずであるのに、「将棋哲学」での▲二五銀は明らかに戯曲「王将」で描かれているような強烈な反撃でもなければ、即効性のある大胆な手でもない。二五の銀は一発逆転を狙った手ではなく、阪田が銀の働きを悪くしてしまったことを後悔する手なのである。つまり北條秀司は阪田三吉の人生をなぞるべき戯曲「王将」で最も大切といえる将棋の内容を変えてしまっているのである。ここで問題になるのは北條秀司が意図的に描写を変えたかどうかだが

坂田翁ほど褒貶の二分した人物もすくないだろう。ベタ惚れの人がある反面、露骨に莫迦呼びわりする人も多かった。ベタ惚れの筆頭は、いまは亡き京都の家村喜三郎氏だった。花田八段さんの紹介状を貰って、聖護院のお宅に伺うと、ようこそとばかり、半日がかりで話のありったけを喋って下さり、そうだ、坂田先生がおさしになった将棋盤があつたな、あれを見ていただけこうと、長い間かかって土蔵の中を探させ、うれしそうにわたしの前に据えて、どうぞ此の盤で一局と言われる。「生憎将棋は全然知らないので」と言うと、「へえそれで将棋さしの芝居を書かはるのどつか。」と呆れた顔をされた。三〇

とあるように北條秀司自身は将棋について詳しくはなかったようである。しかし「王将」の将棋の内容に対して無頓着であつたかといえそうではない。一九四九年五月に出版された初出の戯曲「王将」では実際の「泣き銀の局」の棋譜は作中で出てこないが、一九六三年に出版された『北條秀司戯曲選集』<sup>三三</sup>に収録されている戯曲「王将」には坂田が「泣き銀の局」を振り返るといふ形で棋譜が追加されているのである。

三吉 ……けど関根はんはつよいなあ。…昨日の追い込みの凄まじさはどうやった。わいは一生あの将棋を忘れへん…。(頭の裡の駒の動きを諳んじる) 四七の歩。…同飛車。…六六の香。…七五の歩。…ほんまに名人やなあ。…玉江が褒めよるのは当たり前や。…七三の飛車。七七の金。…同桂成り。…同銀。(うとうとして来る。しかし眼底にはまだ盤があるらしい)

…五六の金。…八八の銀。…同成り香。(睡気が襲う。…だんだんと声がカスれて来る。しかし、まだ眼底からは駒が去らない) ……六六の角。…同じく金。…七四の香。(遂に眠りにひき込まれる)

この坂田が諳んじている棋譜は実際行われた「泣き銀の局」の棋譜で間違いない。この棋譜を追加したという事実からは、北條秀司が自分で「泣き銀の局」を描写していたつもりが、北條秀司自身が気づいたのか誰かに指摘されたのかはわからないが、実際の「泣き銀の局」と戯曲「王将」内の「泣き銀の局」が全く違うことを認め訂正したのではないかということが推測できる。「作家として、殊に同郷の後輩として、敬愛する翁の生涯を温かい眼を以て完全な姿に書き残すことは、私の自由であり、権利であり、そして義務である」とまで言い張った北條秀司の姿勢としては、フィクションだからといった言い訳は使わないことは正しいのかもしれない。しかし北條秀司はミスを全く訂正できていない。むしろ中途半端に棋譜を追加するという対処をしたことは明らかにマイナスになってしまっている。なぜならば本来の「泣き銀の局」の棋譜を追加したところで、肝心の戯曲「王将」内の北條秀司が「泣き銀の局」を描写したつもりの対局は一切訂正されていないからである。つまり坂田が「泣き銀の局」として指した棋譜と対局後の夜に坂田が諳んじている棋譜は全く同じであるべきだが、作中で矛盾してしまうというありえないことが起こってしまっているのである。

ここで一九六二年版の話に戻る。映画内で描写された▲二五銀の局面は本来の「泣き銀の局」とは全くといっていいほど共通点がないが、北條秀司が内容を変えてしまった「泣き銀の局」の描写とは

完全に一致するのである。

そこで映画で使われた「泣き銀の局」の棋譜に関する記事<sup>三</sup>を見ていきたい。

大阪の生んだ将棋の天才坂田三吉を主人公にした「王将」(北條秀司原作)が三たび映画になった。こんどの東映作品では、三吉が三国連太郎、女房小春が淡島千景という配役だ。

将棋の升田幸三九段、「王将」映画化のたびに技術指導を引き受けてきたが、同九段に専門棋士の見た将棋映画について話してもらった。まず、将棋指導の担当者として升田九段は「こと将棋に関するかぎり、映画に決してウソは許さなかった。」という。コマの持ち方をはじめ、一瞬のうちに消え去るシーンでも、将棋の盤面がうつる場合はコマの配置がおかしくないようにした。たとえば、三吉が一人で将棋を研究しているシーンなら、若いころの三吉には明治末期に流行した将棋の型をうつし、晩年の三吉には近代戦法を取り入れるというぐあい。有名な「銀が泣いている」というシーンも、升田九段のアイデアだという。三吉その人を直接よく知っている升田さんは、出演者に三吉の人柄を語って聞かせた。「とくに三吉が創造派の人間であったことを強調した」そうだ。

この記事からは元の△関根金次郎▲阪田三吉戦の棋譜とは全く違う一九六二年版で使われている棋譜が升田によって創作されているものだとわかる。なぜ創作する必要があったのか。

升田は悩んだのではないか。「駒になった坂田 盤上で泣く」では▲二五銀は中盤の悪手として阪田が後悔している指し手であるが、

戯曲「王将」ではその悪手のはずの▲二五銀で関根のミスを誘い逆転勝ちしたことになっているからである。そして升田は辻褃をあわせるため▲二五銀で逆転するという局面を創り上げた。つまり一九六二年版は原作の戯曲「王将」の間違った対局内容に忠実に作られたからこそ「将棋哲学」の「泣き銀の局」とは程遠い局面ができてしまったと言うことができるのではないだろうか。

## 二―二 一九四八年版映画「王将」

時期が前後するが、続いて一九四八年版映画「王将<sup>三</sup>」について見ていく。一九四八年版は初めて戯曲「王将」が上演された一年後に早くも上映され、阪田三吉の知名度を高くした。監督は一九六二年版と同じ伊藤大輔監督が務め、阪田三吉役は三国連太郎が演じている。

一九四八年版と一九六二年版の「泣き銀の局」を比較すると実在の阪田三吉の棋譜とは「二五の銀」を打つ位置が違っていることが共通してはいるが、局面自体は似ているようで異なっている。一九四八年版での「泣き銀の局」で坂田が▲二五銀打とした局面図を巻末資料編の【資料五】に掲げた。「二五の銀」を打った後の局面が一九六二年版では単純なのに対して、一九四八年版の場合複雑になっているのである。一九六二年版では▲二五銀△同歩▲同飛が王手馬取りになり、実際にそのように進むという派手でわかりやすい展開であったのに対して、一九四八年版では▲二五銀打△同歩▲同飛が王手角取りになるのを見越して▲二五銀打に△三五歩と突き、以下▲同角△二五歩▲四四歩△三四金▲四三歩成△三五金▲同歩と進み

敵玉の近くにと金をつくり坂田が優勢だといえるが、王手角取りほどのわかりやすさはなく、関根金次郎が王手角取りを防ぐために△三五歩を突いたという理由も作中では全く説明されないため、将棋を知らない人にとっては何が起きているのか全くわからないように思われる。そして最も問題であるのが▲二五銀打を放置しても厳しい手が全くないことである。銀を取らずに△四二角と角を引くとびつたり二四の地点を守ることができ、攻めが完全に切れている。

ただ銀を四にして最終的に歩を成ることに成功している一九四八年版の局面が、「駒になつた坂田、盤上で泣く」での「殺されやうとした銀が却って敵陣で存分の働きをすることができ」の部分に、棋譜自体が全然違ふとはいえ、似ていることは否定できない。この点は一九四八年版の方が一九六二年版より本来の「泣き銀の局」に近いと言えるだろう。

また一九四八年版では敗着になつた△三五歩が一九六二年版では正着になつていることは棋譜を創作しているのが同じ升田幸三であることを考えると何かこだわりがあるのかもしれない。

ここまで一九四八年版内で扱われている棋譜に不備がないという仮定で話を進めてきたが、そもそも一九四八年版では作中で登場人物が述べている棋譜と実際の映像で現れる局面が矛盾している。以下は棋譜について言及している記者の発言である。

記者「勝つたよ勝つたよ、坂田七段の快勝。いくよ、いいかい。

▲二八飛、△三三銀、▲二五銀、▲二五銀だよ。うん？ははは、そうなんだよ、この奇想天外な銀一枚が勝利の原因なんだ。それに対して関根八段、△三五歩、▲同角、△二五歩、▲四四歩、△

三四金、▲四三歩、△三五金、▲同歩」

実際にこの順の直前から棋譜を並べると△三五歩に対して▲同角とは四六に歩があるので取ることはできない。仮に角を通すために四五に歩が進んでいたとすると▲二五銀△同歩▲同飛が王手角取りにならない。四六に歩がない状態を作るには例として▲四五歩△同歩以外の手▲四四歩△同銀の後に銀を引いて四四歩を打ち直すというような、攻めがつながっている後手としては不自然な手順が必要になる。つまりこの棋譜には明らかに無理がある。他にも七九にあったはずの桂馬が八九にあつたり、三六に歩がある映像とない映像があり、ない場合△三五金に▲同歩と取る変化が成立しなくなったりと作中での将棋の扱いがよかつたとは思えない。これは一九六二年の新聞記事であり参考にしていいかは疑問だが、技術指導を担当した升田の「こと將棋に関するかぎり、映画に決してウソは許さなかつた。」という。コマの持ち方をはじめ、一瞬のうちに消え去るシーンでも、将棋の盤面がうつる場合はコマの配置がおかしくないようにした」という方針が守られていないということである。むしろ一九四八年版でのミスがあつてこそその発言の可能性もあり、そこからより改善されたものが同監督による一九六二年版での「泣き銀の局」であるのかもしれない。一九六二年版では少なくとも棋譜自体に矛盾は見られず、局面自体も派手であり、それまでの経験が生かされていると言えるだろう。ただ一九四八年版に見られるミスからは、波乱万丈な人生を送つた人間としての阪田が優先的に描かれており、将棋棋士としての阪田は二の次にされていると言わざるを得ない。

### 三 現代で表象される阪田三吉

次に現代で阪田三吉はどのように表象されているのかについて見ていきたい。以下は二〇一七年十二月十一日に日本将棋連盟公式サイトに掲載された将棋コラム<sup>三四</sup>を引用したものである。

ご存知の方も多いと思いますが、阪田三吉は明治時代から昭和初期に活躍した伝説の棋士。北條秀司原作による新国劇「王将」というタイトルの戯曲や映画、さらに村田英雄の歌「王将」のモデルになった人物です。

将棋という一芸に打ち込む中で自らの哲学を学び取っていった阪田三吉。幼い頃から丁稚奉公に出て、文字は将棋の駒の字くらいしか読めず、常識はずれな行動もずいぶん多かったと言われますが、凡人の教養では及びもつかない名文句を数々残しています。

一九一三年（大正二年）に行われた宿敵、関根金次郎との対局において、関根金次郎の挑発的な手に対して、阪田三吉は「銀（銀将）を動かします。阪田としてはその銀を関根に取ってもらうことで、香車を動かして攻めに転じようという腹でした。ところが、関根がその意図を読んで、取ってくれない。銀は「とってくれ、いっそ殺せ！」と叫んでいるのに、敵は殺してくれない。それで彼は「銀が泣いている。」と言ったのでした。

後日そのときを振り返って、朝日新聞紙上の「将棋哲学六、阪田名人実話」で、阪田本人はこう述懐しています。「あの銀は」

ただの銀じゃない。それは坂田が銀になって、うつむいて泣いている銀だ。それは駒と違う、坂田三吉が銀になっているのだ。その銀といふ駒に坂田の魂がぶち込まれているのだ。その駒が泣いている。涙を流して泣いている。今までわたしは悪うございました。強情過ぎました、あまり勝負にあせり過ぎました。これからは決して強情はいたしません、無理はいたしません、といって坂田が銀になって泣いているのだ」

将棋に人生を懸けるとはこういうことなのだ、と圧倒されます。まさに駒と自分が一体になっていないと出てこない、すごみを感じさせる言葉です。

（中略）

阪田三吉や羽生棋聖のように、ひとつのことをとことん極めてきた方の、その一言には人生において参考になる教訓が含まれています。偉大な棋士たちの言葉に注目し、その人生観を感じてみてはいかがでしょうか。

このコラムでは阪田の後悔している手が▲二五銀ではなく▲二五銀△三七桂と銀を狙われたときに指された▲一六銀と歩を取った手のように読める。そして数手後にその銀を取ってもらえないことを「銀が泣いている」という意味だと解釈している。このコラムで「銀が泣いている」とされている局面図を巻末資料編の【資料六】に掲げた。一見、一連の流れの中で指された手であるので違和感はないように思える。しかし△関根金次郎▲阪田三吉戦の感想戦<sup>三五</sup>を知っていれば、阪田は▲一六銀に対しては実戦で指された△一七歩打ではなく銀の逃げ場所をなくす△二六歩の方が良かったという指摘を

していることがわかる。またコラム中で引用されていない「駒になつた坂田 盤上で泣く」の後半で阪田は「まあゆつくりなさい」といった態度に出られたらとても勝てる将棋ではなかった」、「殺されやうとした銀が却って敵陣で存分の働きをすることができ、形勢一転してたうとうこの晴れの勝負に勝てた」と関根が一気に、最善ではない手順で▲二五銀を取りに来ようとしたおかげで勝つたと述べているのであり、その銀を取りに来ようとした手順のあとに阪田が「銀が泣いている」と表現するのは不自然で、その後の文脈と矛盾することになる。このコラムの解釈の間違いからはどれだけ「銀が泣いている」という言葉が阪田を語る場合に先行してしまっているか、▲二五銀という指し手の正しい解釈が難しいかがわかるように思う。

現代においても阪田は将棋に関連した話題では名前を見かけることがあり、知名度で言えば同時代に活躍した関根金次郎や土居市太郎といった棋士達よりも圧倒的に高い。それは数々の逸話や名台詞、そして何よりも阪田をモデルとした「王将」というコンテンツが大ヒットしたことによるだろう。しかし、だからこそ現代で阪田が語られるときはフィクションとしての坂田三吉が先行してしまっている。銀が「泣いてゐる」の阪田三吉はそれ以上語られることなく、銀が「泣いてゐる」がどのような文脈での言葉なのか、どのような経緯で銀が「泣いてゐる」と表現したのかということとはそもそも見向きもされない。

北條秀司「王将」は大ヒットして阪田三吉の存在を多くの人に知らしめた。それ自体は間違いなく北條秀司の功績であり、「王将」が存在しなければ阪田三吉は昔活躍した棋士の内の一人として埋もれ

てしまい、現代で語られることはなかったかもしれない。しかし逆に言えば「王将」が大ヒットしていた頃は「王将」なくして阪田を語ることはできない状態が続いていたということである。それが現代では落ちつきを見せ、阪田三吉と言えば「王将」という構図は絶対のものではなくなっているのではないか。

「将棋哲学」において阪田が当時どのような立場で自らの人生を語ったのかということはこれまで「王将」といったフィクションに先行され軽視されてきた。そこで本論では、これまで無関係だと思われてきた「将棋哲学」で語られたエピソードと阪田が東京棋界から絶縁された事件を「将棋哲学」が掲載された時代に着目することで関連させ、可能性としての新たな坂田三吉像を示した。しかし阪田三吉にはまだ他にも実像が曖昧になっている部分がある。そしてその曖昧な部分は、主観的な情報ではなく客観的な情報を集めることではつきりさせていくことができるだろう。阪田を語るために「王将」が必要ではなくなった現代だからこそ、これまでではなかった角度から阪田三吉に関する資料が見直され、阪田三吉像が模索されていくべきではないだろうか。

一 北條秀司「王将」『戯曲集王将』新月書房、一九五二年五月

二 阪田三吉の「さかた」という苗字には「阪田」と「坂田」の二つの説があり、本論では実在した三吉を日本将棋連盟で公式に採用している「阪田」、「王将」の主人公である三吉を「王将」で用いられている「坂田」と表記する。

三 織田作之助の作品における阪田三吉については斎藤理生「方法としての坂田

- 三吉「織田作之助の作品と将棋」『日本近代文学』二〇一七年五月）で詳しく論じられている。
- 四 織田作之助「聴雨」『新潮』一九四三年八月
- 五 織田作之助「勝負師」『別冊文藝春秋』一九四九年八月二〇日
- 六 織田作之助「可能性の文学」『改造』一九四六年十二月
- 七 北條秀司「王将後記」『北條秀司戯曲選集』青蛙房、一九六三年五月
- 八 佐藤純爾監督「続・王将」東映株式会社、一九六三年十二月
- 九 伊藤大輔監督「王将」東映株式会社、二〇一四年七月
- 一〇 東公平『阪田三吉熱戦譜』(3)『大泉書店、一九七九年
- 一一 北條秀司「王将」と「文楽」『教育と社会』印刷片、一九四九年五月
- 一二 北條秀司「王将後記」『北條秀司戯曲選集』青蛙房、一九六三年五月
- 一三 中島富治「王将一代」『将棋近代』近代将棋出版、一九五六年一月
- 一四 酒井隆史「王将」阪田三吉と「ディーブサウス」の誕生』『通天閣 新日本主義発達史』青土社、二〇一二年一月
- 一五 阪田三吉「将棋哲学（一）〜（十一）」『大阪朝日新聞』一九二九年一月八日〜一月十九日
- 一六 東公平「阪田三吉物語第二部第四局第一譜」『朝日新聞』一九七七年十月二十四日
- 一七 『将棋新報』大正二年五月。なお、本論で△関根金次郎▲阪田三吉戦とするときは大正二年四月六日から七日の二日に渡って指された△関根金次郎▲阪田三吉戦を指すこととする。
- 一八 『大阪朝日新聞』一九一〇年七月七日
- 一九 阪田三吉「将棋哲学（六）」『大阪朝日新聞』一九二九年一月十三日
- 二〇 「東西将棋両大家手合（一）〜（四）」『朝日新聞』一九一五年五月一七〜二〇日
- 二一 「勝負師一代」坂田三吉聞書②（四）『近代将棋』近代将棋出版、一九七四年十月
- 二二 天狗太郎『将棋101話』光風社出版、一九八〇年八月
- 二三 『将棋新報五卷五号』山静堂、大正二年五月
- 二四 阪田三吉「将棋哲学（六）」『大阪朝日新聞』一九二九年一月十三日
- 二五 桑島鈍聴子「名人問題に就いて」『将棋月報』将棋月報社、一九三二年一月
- 二六 『大阪朝日新聞』一九二一年一月三〇日
- 二七 岡本嗣郎『9四歩の謎 孤高の棋士・坂田三吉伝』集英社、一九九七年三月

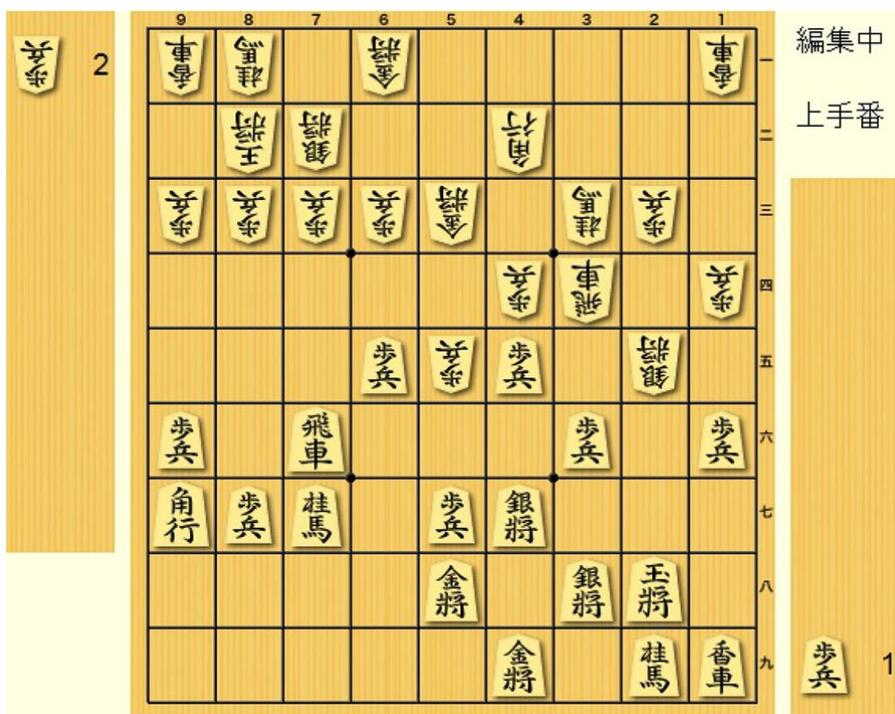
- 二八 『大阪朝日新聞』一九二五年三月十二日
- 二九 伊藤大輔監督「王将」東映株式会社、二〇一四年七月
- 三〇 北條秀司「王将後記」『北條秀司戯曲選集』青蛙房、一九六三年五月
- 三一 北條秀司「王将」『北條秀司戯曲選集』青蛙房、一九六三年五月
- 三二 「三人三様の三吉 升田九段、映画「王将」で語る。」『大阪朝日新聞』一九二二年十一月二十一日
- 三三 伊藤大輔監督「王将（一九四八年版）」大映・京都、一九四八年十月
- 三四 安次嶺隆幸「伝説の棋士・阪田三吉の名言「銀が泣いている」に込められた想いとは？」[https://www.shogi.or.jp/column/2017/12/post\\_288.html](https://www.shogi.or.jp/column/2017/12/post_288.html)（二〇一七年十二月十三日確認）
- 三五 『将棋新報』大正二年五月

資料編

【資料一】『将棋新報五卷五号』、山静堂、大正二年五月  
 大正二年四月六日東京市築地俱樂部  
 左香落ち△八段関根金次郎 ▲七段阪田三吉

△七六歩 ▲三四歩 △六六歩 ▲五四歩 △七八飛  
 ▲四二銀 △六八銀 ▲五三銀 △四八玉 ▲三五歩  
 △三八銀 ▲三二飛 △六七銀 ▲三六歩 △同 歩  
 ▲同 飛 △五八金左 ▲三四飛 △三七歩 ▲六二玉  
 △三九五 ▲七二銀 △四六歩 ▲七一玉 △七五歩  
 ▲一四歩 △一六歩 ▲五二金左 △二八玉 ▲四四銀  
 △六五歩 ▲三三桂 △七四歩 ▲同 歩 △同 飛  
 ▲三五銀 △五六銀 ▲七三歩 △七六飛 ▲一三歩  
 △四七銀引 ▲八二玉 △四五歩 ▲二四銀 △三六歩  
 ▲五三金 △九六歩 ▲五五歩 △九七角 ▲三一歩  
 △七七桂 ▲四二角 △二六歩 ▲四四歩 △二五歩  
 ▲同 銀 △三七桂 ▲一六銀 △四四歩 ▲二四飛  
 △二七歩 ▲四四飛 △一七歩 ▲一五歩 △三五歩  
 ▲二五銀 △二六歩 ▲一四銀 △三六飛 ▲三二歩  
 △四六飛 ▲四五歩 △三六飛 ▲一六歩 △同 歩  
 ▲一五歩 △三四歩 ▲一六歩 △一八歩 ▲一五銀  
 △三三歩なる ▲同 歩 △二七桂 ▲二四銀 △二五歩  
 ▲一三銀 △一六飛 ▲五二金引 △四二角なる ▲同 金  
 △三六飛 ▲二四歩 △六四歩 ▲同 歩 △四六歩  
 ▲二五歩 △四五桂 ▲二四銀 △三九五 ▲六二角  
 △三一歩 ▲四一歩 △二二角なる ▲一八香なる △同 香

▲一七歩 △同 香 ▲四三飛 △七五歩 ▲三四歩  
 △一二香なる ▲一五歩 △六三歩 ▲同 飛 △四四香  
 ▲三五歩 △三七飛 ▲三三金 △同桂成 ▲同 銀  
 △五四金 ▲二二銀 △同成香 ▲四四角 △同 金  
 ▲三六香 △同 銀 ▲同 歩 △同 飛 ▲一七角  
 △二八歩 ▲四四角なる △三二飛成 ▲三七歩 △同 銀  
 ▲三三飛 △同 龍 ▲同 馬 △六二歩 ▲同 金  
 △三五角 ▲四四銀 △一三角なる ▲三六歩 △同 銀  
 ▲三五歩 △同 銀 ▲一九飛 △四八玉 ▲三六桂  
 △五九五 ▲三八金 △三九歩 ▲同 金 △六八玉  
 ▲四九金 △六七玉 ▲四八金 △六八金 ▲六九飛なる  
 △七八飛 ▲九九龍 △七六歩 ▲六五歩

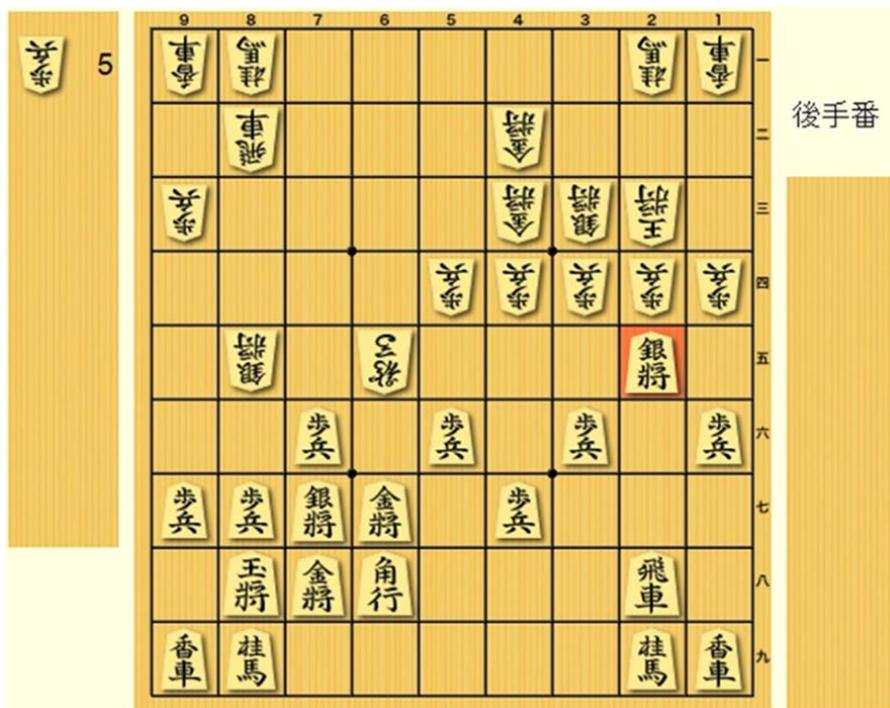


【資料二】図は筆者が大正二年四月六日に行われた△関根金次郎▲阪田三吉戦の棋譜を参考に将棋所の作者「将棋所 3.9.2」、(二〇一七年九月二十九日)を使用して作成した。以下の図も同様に「将棋所 3.9.2」を使用して作成した。左図は▲二五銀として「銀が泣いてゐる」局面。

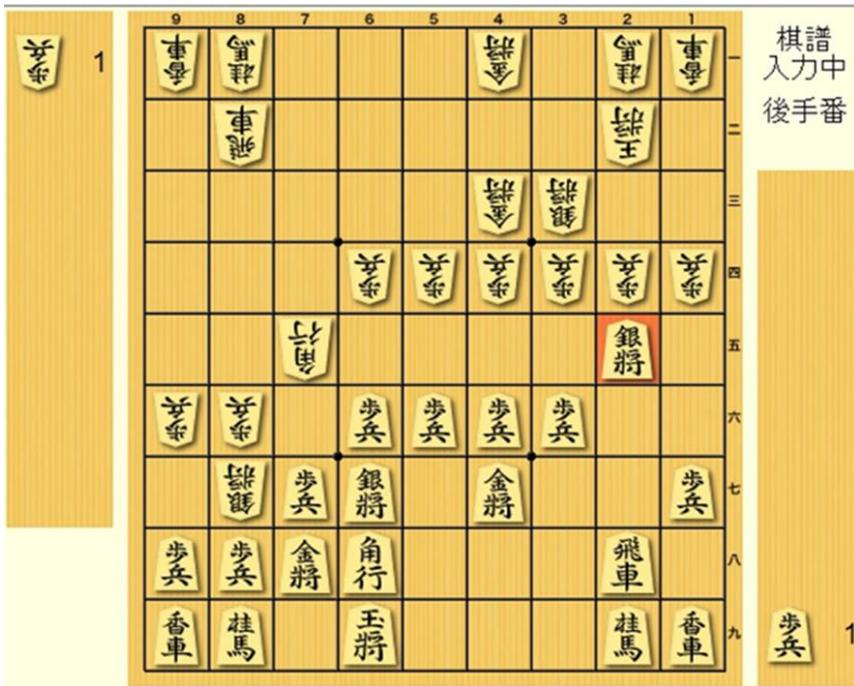
【資料三】「東西将棋両大家手合(一)〜(四)」『朝日新聞』一九一五年五月一七〜二〇日  
一九一五年四月二日都合三日間 柳澤伯爵邸に於いて  
▲大阪八段阪田三吉 △東京八段井上義雄

- ▲三四歩 △二六歩 ▲五四歩 △五六歩 ▲四二銀 △七六歩
- ▲三三銀 △四八銀 ▲四四銀 △二五歩 ▲三三歩 △三六歩
- ▲五二飛 △六八玉 ▲六二玉 △三七桂 ▲五五歩 △同歩
- ▲七二玉 △七八玉 ▲六二銀 △五八金右 ▲三二金
- △一六歩 ▲五一飛 △九六歩 ▲四二角 △六八銀
- ▲五五銀 △五六歩 ▲四四銀 △五七銀左 ▲三三桂
- △四六歩 ▲七四歩 △四七銀 ▲九四歩 △一五歩
- ▲七三銀 △六八金スグ ▲六四銀 △六六銀 ▲七五歩
- △同歩 ▲同銀 △五七金スグ ▲六四銀 △五五歩
- ▲五四歩打 △同歩 ▲同飛 △五六銀 ▲五五歩
- △六五銀右 ▲五一飛 △五四歩打 ▲七三歩打 △六四銀
- ▲同歩 △四五銀打 ▲三五歩 △四四銀 ▲同歩
- △三五歩 ▲三六銀打 △七六歩 ▲三七銀成 △二九飛
- ▲八四桂打 △八五銀打 ▲七四銀打 △八四銀 ▲同歩
- △五五銀 ▲四三銀打 △三四桂打 ▲三一角 △二四歩
- ▲同歩 △二二歩打 ▲五四銀 △同銀 ▲同飛
- △五五歩打 ▲五一飛 △二一歩成 ▲五三角 △二二と
- ▲四三金 △二四飛 ▲五六歩打 △同金 ▲四七銀打
- △五四歩 ▲五六銀成 △五三歩成 ▲同飛 △五四歩打
- ▲同金 △一一と ▲四七銀寄 △二二飛成 ▲六二金打

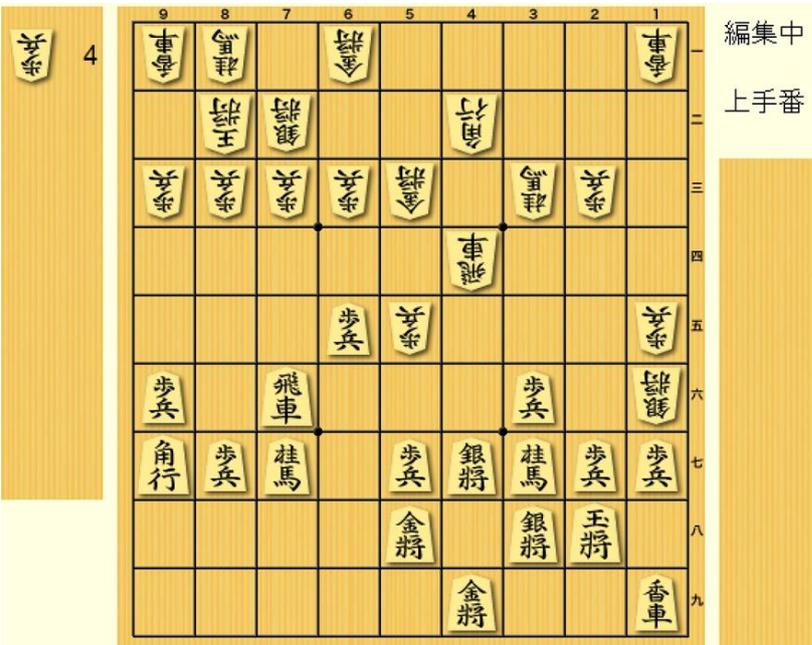
- △三一角 ▲五七歩 △五九歩 ▲六三飛 △四二桂成
  - ▲六五歩 △五二銀 ▲六六歩 △同 角 ▲同 飛
  - △四九銀成ラズ ▲同 金 △六六歩 ▲五八歩成 △同 歩
  - ▲六七歩打 △七七金上ル ▲六八歩成 △同 玉 ▲六二歩打
  - △四一飛打 ▲八八銀打 △七八玉 ▲七九角 △八六歩
  - ▲五八成銀 △四九香打 ▲五一歩打
- 迄にて阪田氏の勝ち



【資料四】図は筆者が一九六二年版映画「王将」での「泣き銀の局」の映像を参考に作成した。一九六二年版映画「王将」で△六五馬に對して▲二五銀打としたところ。以下実戦では△同歩▲同飛とした手が王手馬取りになり先手の坂田が優勢になる。しかし図の局面では△三五歩が正着で後手良し。



【資料五】図は筆者が一九四八年版映画「王将」での「泣き銀の局」の映像を参考に作成した。一九四八年版映画「王将」での「泣き銀の局」で先手の坂田が▲二五銀打としたところ。以下実戦では△三五歩▲同角△二五歩▲四四歩△三四金▲四三歩△三五金▲同歩と作中で記者が言及しているが図からその順に進めようとする、映像上の盤面に不備があり進めることができない。



【資料六】図は筆者が大正二年四月六日に行われた△関根金次郎▲阪田三吉戦の棋譜を参考に作成した。【資料二】の図から△三七桂▲一六銀△四六歩▲二四飛△二七歩打▲四四飛△一七歩打▲九五歩とした局面。コラムではこの銀を取ってもらえないことを「銀が泣いている」と解釈していたが、阪田は感想戦で△一三歩打ではなく△二四歩とするのが最善だと述べており、この局面で「銀が泣いている」と解釈するのは間違いであると言える。